

研究の窓

医学教育改革論の社会的背景

懸 田 克 躬

近頃は医療にまつわるさまざまな不祥事や医療の歪みが問題とされ、しかもその中心にあるものとして医師の在り方あるいは医の倫理がとりあげられることが多い。医育機関に身をおくものとしては自分たちの育成した医師たちがその中で働く医療の世界の現状に思いを馳せたり、医療の将来はいかにあるべきかなどについて思い悩まざるをえないのが実情である。もちろん、医療は医師のみで担いうるものではなく、今後もしよよいその数を増してゆくであろう各種医療関係職種をかかえた医療チームが、与えられた医療制度の中で力を合わせて努力してこそ可能なものであり、しかもこの医療チームの姿は時代とともに変わってゆく。しかし、医師がチームの中心的役割を果たすものであろうことは動くまいと思われるので、変革してゆく医療に正しく対応できる医師を育成しているかとの反省を強いられ、今後いよいよ困難をますであろう課題の大きさを思わざるをえないのである。換言すれば今日の医学教育は将来の医療の正しい展望の下に方向を誤ることなく舵をとっているかという、苦悩にみちた問いかけを強いられているということだともいえよう。医学教育の改革が絶えず問題とされているのもその現われの一つであろう。ただし、医学教育改革というとき今日しばしばとりあげられているような教育方法論の改善は、おそらく問題の本質を捉えたものではないであろうことは注意しなければなるまい。

医学部出身者ではあるが臨床医としての道を歩まず、絶えず医療の歪みを告発し、あるべき医師の姿勢と医療の姿を指摘しつづけているある論者は、昔も今も期待される医師像は変わっていないのに医学教育について絶えずこと新しく論ぜられなければならぬとは不可思議なことだと辛辣な皮肉を述べている。そして国民の側からみて望ましい医師像は、十分な医学の知識と技能とを備え、患者には親身に接し、しかも身近にいてくれる医師がそれなのだと指摘し、医学教育問題を医師のみの視点から問題とすることは誤りであり、医療をうける人々がどのよ

うな医療と医師とを望んでいるかを考慮に入れるべきであるという。今日的なニーズに応える医師を教育することからまず考えるべきであるというのである。

医学教育改革の動きへのこの逆説的な批判は、実は、医学教育の改革の内容を抜本的に考えなおすことを強く求めているものではあるまいか。今日の医学生が医療の第一線に立つのは10～15年の後であるから今日の教育の内容と学生数とは少なくとも10年か20年後の医療のニーズに応えるためのものでなければならぬ。医学の進歩に対応する医療の仕組みの変化を予測しつつそのための基礎的教育に力を入れ、知識と技能と医師としての心構えを身につけさせるよう努力することは言葉としては昔も今も変わらない課題であろうが、内容は絶えず進歩に対応して変わらなければならないはずである。医学教育の改善はこの意味でもより広い視野を必要とするやむことのない課題である。

論者は必要な医師が身近にいることも条件の一つとしているが、これは単に医師の態度の問題として片づくものではなく、医師数の問題、医師の地域分布の状況にも左右されることなのである。とすれば問題は医療制度、医療システムならびに医療保障の問題とも密接に関係しており、狭義の医学教育よりはむしろ医療行政の立場から考えなければならないはずの政治的なことである。将来医師数がどのように増加してゆくかは推計できるとしても、それによって必要な医師数の結論はでてこない。必要な医師数とはむしろ、どのような医療を国民に提供するかという政治の問題であり、これを抜きにした今日の過剰論は意味がないであろう。医療システムも医療保障もまた然りである。医学教育に欠けたところがあるとすれば、むしろこの種の医療経済学または医療社会学の一応の知識を学生にも与え、また医育機関の中にこの種の研究部門をもたずに医学教育の、ひいては医師の視野を狭め今日の混乱をきたす遠因を作ったことではないだろうか。

(かけた・かつみ 医学教育振興財団理事長)